



開拓史の刊行を祝して

眞 造 圭 一 郎

大八洲開拓農業協同組合には、私がかつて県庁で農地開拓課長を勤めたことのある山形県の出身者が多い。組合長の佐藤孝治さんは、山形県最上郡及位村の出である。私がこの大八洲開拓に特別な近親感を持つのは、この外にもっと大きな理由がある。それは、今から三十年前、立場は違っていたがこの方方と一緒に満洲開拓の仕事にたざさわり、敗戦によって生きるか死ぬかのギリギリの線まで引き揚げの労苦を共にして来た。いわば満洲開拓の同志だからである。旧臘十二月二十六日、私はブラリと守谷に下車し、大八洲の事務所を訪ねた。私は、この書物に収められた数数の記録や写真や統計類を原稿の段階で非常な感動をもって拝読したのであるが、ここに記録されている人間苦闘の歴史が、今、現地の同志の上にとんな姿で結実しているかを自分の目で確かめたい思いに駆られたのである。

風もない暖かい冬の陽を背中一杯に受けながら私は、高橋副組合長さんの案内で流作地区、菅生地区、立沢地区から移転して来た地区の順にゆっくり一巡させていただいた。圃場は一見して大八洲のそれとわかるように牧草栽培が圧倒的に多い。よく手入れのゆきとどいた乳牛とその牛舎、新しい管理システムをとり入れた養豚と清潔な豚舎、家族一同団らんを楽しむ快適な住宅等。それは、あきらかに三十年の歴史がじっくりと育て上げた酪農農家集団のゆとりある姿であった。そこにあるゆとりは、決して単なる収入面だけのものではなく、満洲開拓、引揚げ、戦後開拓を通ずる永い苦難の道を酪農一すじに乗りこえて、現在をきざぎざ上げたこの方方だけが持つ精神のゆとり感なのである。彫りの深い顔、それでいて

澄んだ瞳、いかつい手足だが何かを慈しむような身のこなし、朴訥さの中に謙虚さをつつんだ話し振り等、この人達の間像は、土と家畜と人間の三者が一体となって構成された酪農農家集団の中で、人間が生きることの本願を追求しつづけて来た人達の姿である。誰もがそれを意識して現在に到ったわけではないが、この人達の生き、かつ歩んで来た道は、まさに求道者の道そのものであったと言ってもすこしも過言ではないのではなからうか。

私は早い落日の中を帰途につきながら、こんなことを考えていた。そしてこの書物は組合員七十七戸の方方の思い出をつづった貴重な記録としてだけでなく、この方方の永い求道生活の道標をそこに読みとらなければならぬと、つくづく思ったのである。

何としてもこれを印刷したいという組合員の皆さん方のお気持ちは、この書物を手にされる方方に、このような読み方を期待しておられるのではないかと、おこがましくも私は推測している。

昭和四十九年二月